

IISEフォーラム2023 セッションレポート

「開会挨拶」

国際社会経済研究所（IISE）は「IISEフォーラム2023」を2023年2月10日に開催しました。新たに取り組みを開始した経済安全保障分野と未来への市場戦略を提示するThought Leadership活動に関し、持続可能な社会の実現を阻むリスクや課題、その解決に必要な変革について、知を重ね合わせる議論の場を持ちました。基調講演には戦略国際問題研究所（CSIS）ジャパンチェア クリストファー・ジョンストン氏をお招きし、また、数々の有識者の皆様にご参加いただき世界経済の未来を語るパネルディスカッションや、防災とカーボンニュートラル、グリーントランスフォーメーション（GX）、スマートシティ、スポーツ、ヘルスケア、グローバルヘルスという6つの視点から有識者を交えたセッションを行いました。

開会の挨拶

開会の挨拶として、国際社会経済研究所 理事長 藤沢久美、日本電気株式会社（NEC）代表取締役 執行役員社長 兼 CEO 森田隆之氏が登壇。当フォーラムの意義と国際社会経済研究所が果たすべき役割について説明させていただきました。

国際社会経済研究所 理事長 藤沢久美による挨拶

本日は雪の中、IISEフォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。IISE、国際社会経済研究所は2000年7月、中立的な立場から情報社会の在り方をグローバルな視点で発信するシンクタンクとして設立されました。それから22年を経て、2022年4月、新たに体制を強化して再スタートいたしました。本日のフォーラムは新体制になって初めてのフォーラムです。



Thought Leadership活動が目指すもの

国際社会経済研究所を新体制とした目的は、Thought Leadership活動のけん引です。

Thought Leadershipとは、世界を取り巻く様々な課題を生活者というミクロから地球規模のマクロまで、様々な視点で考え、深掘りし、探索を通じて得た気づきを元に未来の構想、いわゆる社会のあるべき姿やそこに至るための道筋を描き、提案します。そして、共感いただいた方々と共に新たな社会価値、枠組み、仕組み、事業等を生み出し、社会に実装して実現していく活動です。

この新たな目的、ミッションに込めた思いを、星座をモチーフとしたブランドストーリーとして表現しました。

いにしえの昔、人々は夜空に瞬く星の中に星座を生み出しました。星座はその形と位置で種を蒔くべき時を、旅人が進むべき方角を教えてくれました。

今、人類は複雑な社会の中で様々な課題に直面しています。しかし、世界には人々が培った知恵や磨き続けられた技術、テクノロジーがあります。私たちはそれらを星座のようにつなぎ合わせ、道しるべとして皆様にご提示したい。そして、皆様と共に未来を創る歩みを進めていきたい。そう考えております。



国際社会経済研究所の新体制について

では、このミッションをどのような体制で進めていくのか、中核となるメンバーをご紹介します。

社長には、長年NECで海外事業をリードしてきた松木俊哉。そして、理事長には私、藤沢久美が、理事には皆様もよくご存知の宇宙飛行士の野口聡一、経済産業省で国際的な知見を深めてきた林祥一郎が就任いたしました。



IISEフォーラムの紹介

本日のIISEフォーラムでは、Thought Leadership活動の中で考えていきたい、いくつかのテーマを取り挙げております。

まずは、すべてのテーマに大きな影響を与える経済安全保障、そしてマクロ経済です。経済安全保障に関しては、戦略国際問題研究所（CSIS）のジャパンチェアであるクリストファー・ジョンストン様に、このフォーラムの基調講演のためにわざわざアメリカからお越しいただきました。

マクロ経済セッションでは国際社会経済研究所の調査研究のリーダーである天谷がモデレータを務め、日本を代表するエコノミストの皆様にご一緒いただき、世界経済の行方を議論させていただきます。

その後のブレイクアウトセッションでは、防災とカーボンニュートラル、グリーントランスフォーメーション、スマートシティ、スポーツ、ヘルスケア、グローバルヘルス、6つのテーマをピックアップし、有識者の皆様と議論をさせていただきます。

セッションを通じ、皆様にThought Leadership活動を体験していただき、国際社会経済研究所の仲間になっていただくことを願っております。

「世界知で、未来を照らす」

国際社会経済研究所はこのミッションの元、未来を語るだけではなく、皆様と共に未来を創るシンクタンクとして歩み続けてまいります。

IISEフォーラムが、皆様にとって価値のある時間となるよう祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。

森田隆之氏 挨拶

皆様、本日はお足元の悪い中、新生・国際社会経済研究所（IISE）の誕生を祝うこの場にお越しいただき、本当にありがとうございます。本日は新しく生まれ変わった国際社会経済研究所に込めた思いと期待について、その背景も含めてお話しさせていただきたいと思います。



テクノロジーがかつてないほど影響を及ぼす時代

皆様もご存じのように、この10年、20年の間にテクノロジーはかつてないほど社会に影響を及ぼすようになりました。日本がエレクトロニクスやテクノロジーの領域で世界的にトップを担っていた90年代。弊社NECもピーク時は5兆円ほどの規模があり、3つの領域でトップ5を占めていました。しかし、今その領域で世界トップ5を占めるとなると、何十兆円という規模になります。そこから波及する産業や社会的影響力を

考えると、果てしない領域です。また、地政学の領域、例えば、ロシア・ウクライナ戦争においても、このテクノロジーの問題を抜きに語ることができなくなりました。

その一方、テクノロジーが我々の社会、生活の中で生かされるまでに何が起こるかを考えてみましょう。

古くは産業革命の時代にさかのぼってみると、技術が発明されてから社会の中に実装され、溶け込むまでは50年、あるいは60年という年月がかかっています。人々が技術を理解し、教育含めて技術に適合したインフラを創り、社会そのものが変わるまでにそれほどの時間を要するのです。

NECは設立から120年の歴史の中で常に最先端のテクノロジーにフォーカスし、社会に実装してきたと自負しております。だからこそ、テクノロジーが正しい方向で社会に実装されるように働きかけ、人々にとって有益なものとして使うことが我々の使命の一つでもあります。

生活者の視点が技術への視線を変える

第一次産業革命の時のラッダイト運動にも象徴されるように、人々の技術への態度は拒絶感から始まります。

私どももかつて、生体認証やAIについて、人権を侵害するものではないかという誤った理解と戦ってきた経験があります。この問題は企業努力だけでは解けないものでした。

その時に、企業の視点だけでなく、生活者の視点に立ってこの問題を考え、生活者の立場も踏まえて発信していく存在が必要だと気づかされたのです。

我々と同じ方向を向いた、独立した第三者機関、シンクタンクが求められている。ならば、我々自身が動く必要がある、そう考えたのも国際社会経済研究所設立のきっかけです。

NECはNEC 2030VISIONとして、会社が持つ技術の可能性と社会のあるべき姿について「未来の共感を創る」と語っています。

国際社会経済研究所は独立した機関として、徹底的に生活者の視点に立った中立的な立場で、ここにいらっしゃる皆様を含め、世の中と交流し、発信していただきたいと思います。

今回、藤沢理事長、野口理事、林理事、そして松木社長と、本当に素晴らしい方々を迎えることができたことを大変嬉しく思っております。

ぜひ、企業の手が届かないところに大きく羽ばたいていただきたいと思います。私どももその活動に最大の支援と協力をし、技術を正しく使い、よりよい未来を創るために邁進していきたく思っております。よろしくお願いいたします。

